

小田の結納
齋藤の色直

本義太夫節之

一八

七番 竹中砦の段

〔解説〕 寛政元年二月廿一日から北堀江市の側豊竹此吉座初演。作者は若竹笛躬・近松余七・並木千柳。

數ある太閤記種の淨瑠璃の中でも名高いもの一つである。初編五冊、次編五冊合せて十冊物である。初編と次編との間に十餘年の間を置き、初編に於ては美濃の齋藤尾張の小田の確執の因つて来る原因、石川五右衛門、木下當吉、連葉與六等の生立ちを明かし、その山を五の巻參州屋が崖の來作住家の段に設け、次編に至つて順次に前編で設けた發端伏線動機等による葛藤解決を示して、その間に智謀神の如き木下當吉と、大盜石川五右衛門との面目を發揮させようとする仕組になつてゐる。その中ではこゝに收めた七の巻の竹中碧の段（左枝犬清は千里の母の計らひで娘に逢はせようとして密かに連れて來られたのである、それはこの段の口にある）が最も名高くて、しかも全編の山といつても差支ない。

この段では、流石の軍師竹中重晴も、木下當吉の神策と、命を捨てゝの左枝犬清の働きによつて、却つて裏をかくれて、主君の齋藤義龍が、犬清の子を母衣の下に負うて犬清と名乗つて奮戦する當吉の槍先に討取られる事に仕組んであるが、これは言ふ迄もなく今川義元が桶狭間の討死を附會したもので、その犬清の子は木下の庇蔭によつて、敵の軍師の娘と密通したといふ父の科も免されて春永に召抱へられるといふ趣向に因んで「木下蔭狹間合戦」と題したものであらう。

附けていふ、八の巻以下は、石川五右衛門と木下當吉の智恵くらべ術くらべが、足利義輝を弑しようとする三好長慶父子の陰謀をめぐつて描かれて居るが、發端なる芥川の妊婦殺しの伏線が、八の巻の五右衛門の養父治左衛門の懺悔によつて明かされる趣向、及び大話の五右衛門の働きなどを思ひ合せて見れば、本曲は全體としては、木下當吉よりは石川五右衛門を主として居ると見てもよい程である。

（内こそせつなけれ。曲れる枝を直に疵に屈せぬ丈夫の顔色刀を。フシ杖にし寄り。暑氣の頃とは申しながら。撓め木は木と分くる竹中官兵衛重晴手立出づれば。地こはゝながら娘はさ風が當れば御養生のさゝはり。御用も

こそあるべき事。他言せまじき勇者の勢に比べては巖に玉子を打
 潔白。只今見せんと差添の。筭拔きつが如し一つの頼みは官兵
 取り庭先のオクリ松が枝。傳ふ藤かづら衛殿何とぞ主君春永に御味
 の花を目當にはつしと打つ。フシ手続方下さらば。百萬騎の勇兵
 に落散る紫藤の英。大満きつと打守にもをさく劣らぬ貴殿の
 り。詞ム、赤色は小田の旗色。朱を奪軍略。御許容願ひ奉ると退
 ふ紫は武勇鋭き齋藤氏。姓は即ちアノつてフシ頭を下げければ。
 藤原。落花枝に歸らざる官兵衛殿の花。詞ム、スリヤ春永は。小勢
 の金打。地底意も知れて安堵の上は。にて。丹下の碧に籠りをる
 様子包ます申し上げん。詞奴も去る天とな。サ、その御主人へ犬
 文十九年の頃よりも。蝸牛と爭ふ小田清が。勘當御免を願ひの綱。
 齋藤。つひに取合ふ干戈の動き。去年結ぶか切るかは足下の胸
 の冬より領地の境。洲股川に對陣し勝中。ム、ウ。智勇兼備の名
 負は五角と見えたる所。貴殿の下知に將と聞きしに違ふ春永が度
 て美濃路の兵士この三州より取圍み驚度の收軍。必定奇計やあら
 津丸根を始めとして。味方の碧を打破んかと。心迷うて主人の出
 られ。地残るは丹下。フシ中島兩所。馬を留めしが。味方の英氣
 爰ぞ主人の御陣所なれど。矢種兵糧玉に聞き怖ちして敵勢過半落
 藥も至つて乏しき小勢なれば。敵の多失せたる。兩所の碧は明き

 座本豊村吉	小井原直 本陣	三冊目	五冊目	七冊目	九冊目	十冊目	三味線	千種萬成

座本豊村吉
 小井原直
 本陣
 三冊目
 五冊目
 七冊目
 九冊目
 十冊目
 三味線
 千種萬成

城同然。今こそ疑念散じたり。城防戦ます。縋る千里を突退け勿退け。斬込ぢやないかいの。武士の意氣地が立ての用意せよ者どもやつと、フッ呼ばはるむ刀をすかさぬ重晴。かはして利腕したいとて見殺しにする無得心。憐れを聲。思ひ寄らねば母娘共に駆出で。つかと取り。詞手疵は負へどもわれ達知るは武士の常に引きかへ胴慾と恨みヤア何事。調出勤御免の御病中防ぎのが手に及ぶべき某ならず。命は助ける歎くを耳にもかけず。忠義に凝つたる用意とおつしやるは。オ、敵の空虚。早や歸れと。刀たぐつて遙かに投退氣丈の老人脇を練る。フッ軍慮の工夫。を義龍公の本陣へ。告げ知らせん支度け。調味方へ示す合圖の狼煙知らせは。調ムウ五星を鑑みれば。味方は北方坎

ぢやわい。ヤア、スリヤ最斯うと。條件の白刃。目當は庭先烽火臺爲水。時は三更子の土刻水に水を重ぬ前の花の金打。謀計であつたよな。丁どなぐれば筒口へ。石火移る見えければ南方の火の尾州を討つに利ある刻オ、兩家雌雄を争ふ時節。表裏の金打るが。狼煙空に立登り残る砦も一時に限。君の御出馬この圖をはづさすイザ誠と思ふか。何ぞや娘が縁にたより。合はす煙はフッ豫ての要害。地手筈を本陣へ乗換へ引けと。地下知する内に

我を味方に付けんとは。猪小才な小わ見るより南無三寶もう是までと犬清は一間より。詞ヤア、官兵衛。病中のつばと。見透す如き官兵衛が。一句に差添逆手に弓手の脇腹。ぐつと突込む苦勞に及ばず。齋藤治部太夫義龍。疾

逆立つ無金の齒がみ。主君の勘氣ゆるされんと一途にはやつて味方の大必死の深手。なう悲しやと千里は駆寄くよりは是にて聞いたるぞと。地棟さつ

事。わが舌頭に引出せし小田の滅亡今この御最期。母様仕様はない事かとスエと押開かせ。江戸黒革絨の鎧投げかけ。繁金物の頭盔兜花にあれたる走馬の勢

この時。ヘエ、是非もなや口惜しや。カリ縋り歎けば母親も。詞オ、道理ぢひ。前後を守護するナカス諸軍勢。あた犬清が一世の不覺。恨みの切先受取れや。日頃戀しい床しいと案じ暮しりを拂つて見えたる有様。存じがけな

と。地すばと抜いて駈向ふ中を隔つるた其方がいとしさ。地それに引きかへきお成りやと低頭。フッ平身なしけれ女房關路。マア、待つてと身を惜し官兵衛殿。可愛い娘に連添はゞ彈は子ば。義龍快氣の聲高く。詞説き味方

の鋒先にて。過半攻取り敵の要害残りし者は丹下中嶋。只一戦に攻崩さんと。進む手勢を其の方一人。遮つてとめしは太清が内縁に引かれ。二心やあらんかと密に立越え窺ふ所敵の空虚を計り知つたる臨機應變今にはじめぬ竹中官兵衛。疑ひ晴れる上からは短兵急に押寄せて。春永が頭を得る今宵の一戦。ハ、ハ、ハ、心やや。悦ばしと。地我慢に募る剛氣の詞。官兵衛猶も恐れ入り。何條娘が愛に溺れ。義心をいかで忘るべき。戦場の働きこそは叶はずとも。御供御赦免下さるべし。イヤサ〜。手疵も未だ治せざる中。心勞は保養の妨げ。皆に残つて勝利の知らせ相待ちるよ。時刻うつさず出陣せん。地いそふれ續けと勇み立つ。門出を告ぐる鯨波。手勢隨へ。出で給ふ。地跡見送つて官兵衛重晴。主人の疑ひ散ぜし上

は今こそ赦す。太清と未來を契る水盃。女房よきに計らへと。地思ひがけなき一言に。詞エ、そりや眞實でござんすかえ。オ、不便の生害見捨つるも武士の誠意。義心は義心恩愛は恩愛。ソレソレ早くと情ある。夫の心汲み取りし。柄杓の長柄短か夜や。月の満干も。幾千里。タ、キ手に取上げて親々の情戴く。フシ水盃。詞申しわが夫。今といふ今お赦し受けた二世の堅め。未來は女夫婦にと。樂しんだ甲斐もなう。お主大でござんすぞえ。オ、〜悲しい目出度い取結び。酌は此の母。手負ひには忌物なれど。娘が心濁りない柄杓の盃。手をかけて下さらば儀式は済む。サア〜早う大清殿。ヤア祝言とは穢らしい。目前主人の仇敵。竹中が娘の千里。盡未來際夫婦の縁切つたる印は此の通りと柄杓掴んで。フシ投付くれば。詞エ、そんならわたしは未來の縁は。オ、詞交はすも是限りと。地烈しき手負ひが詞の矢取りより早く我と我が咽にがはと突立つる。母は駈寄り狂氣の如く。詞この憂き事を見まいため盡した心も仇事に。地成果てたるか悲しやと。スエカ、涙ながらの介抱に。手負は苦しき目を開き。ア、思へば儚い私が身の上。地この世の縁こそ薄くともせめて未來は蓮葉の。玉の臺で夫事と父様の。忠義の刃鐵に情なや。二世の縁さへ。斷ち切りし心の内の悲しさを。推量して下さんせ迷ふいのとばかりにて。フシ涙に。血汐あらそへり。地折から風が吹送る貝鏡の音寄せ太鼓。さも物凄く。フシ聞えけり。詞官兵衛は耳そばだて。遙かに聞ゆる人馬の物音。早や合戦と覺えたり。地勝負はいかにと心せき見やる外面へ物見の軍

卒。大垣三郎御注進と呼ばはり。勝利を知らする勇みの大音。調扱も味方の三萬餘騎。二手に分かつて中島の。柴田佐久間が堅めし砦へ。ひた／＼と押寄せ。関をつくつて攻めかくれば。見せかけばかりの旗差物無勢の小田方うろたへ眼。鬼と呼ばれし柴田を始め。井栢遠山森佐久間。柵をくゞつて八方へ逃がしは立てじと追詰め。春永が後詰せし丹下の砦も一挫ぎと。味方は破竹の勢ひにて未だ合戦最中なれども。十分勝利疑ひなしと申し捨てゝぞ引返す。ム、味方の手番ひよくしたり。ハテ心地よき知らせよな。ナウ官兵衛殿。一旦味方の勝利とあればお前の忠義も立つた道理。此の上のお願ひは理を非に曲けて小田方へ。お味方あらば犬清殿娘と未來の縁も切れず。せめては清い臨終を勤める

が親の慈悲。ヤア喧ましい心に抱く所存あらば。きやつらを眼前見殺すべきか。主家より賜はる高祿にて身體髪膚を養へば。親子が命は主君の物さ。無益のくり言聞く耳ない。黙りをらうと愛想なき。夫の詞にわつと泣きソレ。その意地づよいお心が劍となつて可愛げに。薔の花を二人まで散らすが親の慈悲かいなう。子よりも可愛い初孫のありとは聞けど顔さへも知らずに暮すばかりかは。調月日もかへず一時に孤兒となす沒義道は。親親子夫婦が修羅道の呵責の種となつたかと夫に恨みの數々を。數へたてたる八つ橋の。涙ちまたの三河路やソノ澤邊の。水も増す程もあら砂踏立て。息を切つて駈來る注進。官兵衛見るよ如何に藤太。いよ。味方の勝利なるやさん候。初度の戦ひ。勝に乗つたる味方の勢まつしぐらに追ひかくれば。逃けたと見えしは敵の術。場所よき所に引返し。初めに代つて柴田が強勢必死と定めし切つ先に。味方もしどろに喰留められ。桶狭間に屯ある。義龍公の御陣の勢追々に駈付け。先手に加はる虚を窺ひ。山道けはしき狭間より。君の御陣の後を目がけ思ひ寄らざる小田春永。諸卒を随へ現れ出で。所々の砦を餌に飼ひ負け色見せしを術と知らず。死地に入つたる大將義龍討取れ。射取れと下知につれ群がかりかゝるを近習の强者。防ぎ戦ふ其の内に。敵勢より母衣武者一人眞先に大音聲。春永の御内にさる者ありと呼ばれたる左枝犬清これにあり。義龍公の御首。イデ賜はらんとはいふより早く槍を捻つて飛鳥の如く。突伏せ難く伏せ隠く内頼み切つたる味方の人々只

一人に斬立てられ。手負ひ討死死人の 駆付け救ひ奉らん。女房物の具。物の かゝる大事を引出せし。根ざしは汝等
山。人間業とは見え申さずと大息つい 具。エ、不吉の吠面。いまはしと 地足 と這ひ寄りく。 地兩手に二人が襟髪
でフシ物語れば。詞ハ、ア扱こそ小田が 踏みこたへ鏡櫃手はかけながらよろ 掴みぐつと引寄せ。 詞五十年來不覺を
謀計に落入り給ふか氣遣はし。そのの けく。氣ははやれども手疵の惱み。 取らぬ官兵衛に。 地よくも恥辱をとら
みならず春永が。馬前に働く犬清とは よろほひく縁先へ。立つては轉けつ せたなア。主君の怨敵國賊めと。捻付
不審し。シテ主君には別條なきや。 居てまろび。心あがけばせき上し。矢疵 けく齒ぎしみ齒ぎり。怒れる眉毛も
さればく。かく亂軍となる上は主人 破れてほとばしる。血汐の 皆目も紅。 逆立つ癪癪。五臟六腑を込み上げて。
の生死覺束なし。 地御先途見届け奉ら また打立つる引鐘に連れて駆来る四の 拳に傳ふ血の涙スエとどめ兼ねてぞ見
んとフシ元來し道へ駈り行く。 地物に動 宮源吾朱になつて立歸り。 詞エ、是非 えにける。 地時しも爰に寄せ太鼓調
ぜぬ竹中も初めて吐息つぎあへず。 詞 もなき御運の末謀計に落入つて。諸卒 に打立てく小田上總。助春永勇名か
スリヤ若者が切腹も苦肉の術であつた も残らず討死し。御大將義龍公手いた がやくその出立ち。欣然と入り給へば。
よな。オ、推量の通り味方の空虚と偽 通れん方も犬清が。刃の下に御落命大 それと見るより無念の息ざし飛びか、
りしは。まつ此の如く義龍をおびき寄 崩れて士卒もちりく。陣所々々も 詞ヤレ騒がれそ竹中氏。齋藤道三を毒
せて討取らんず。これ皆軍師久吉が謀 敵に奪はれ。残る砦はこの一箇所。御 殺し。勿體なくも足利の四海を奪はん
計。今といふ今犬清が。お役に立つた 油斷あるな官兵衛殿と。 地いふ聲もは 義龍が陰謀。その身の敵はその身の積
るこの切腹。ア、嬉しや本望やと。聞く や息切れし。其の儘そこに倒れ伏す。 詞 惡。誰をか恨み敵とせん。元より齋藤
度々にせき立つ官兵衛。 詞チエ、口惜 しやなア。重晴程の弓取りが鼠輩の輩 ハ、ア天なるかな命なるかな。多年の 旗下の貴殿。譜代恩顧といふにもあら
に計られしか。心許なき主人の存亡。 計策一時に破れ。主家の滅亡今日只今。 ねば。我が軍術の師範となり政治を助

け國民を憐むこそは誠の義者。有無の遙かに勝る。御仁恵と思ひ。入つてぞに身を惜しまず。サア／＼と突付返答せられよ。道理に服せず嘲笑ひ。願ひける。大將莞爾と打笑み給ひ。けられ。弱す刃の下雨に紛ふばかりの。調ヤア無益の舌客。千變萬化に理は説ホ、ウ。一名二人希代の犬清。死してしよばしよば髪。すや／＼寝入る稚子けども。眼前主君の仇敵。爰へ来るは火の忠臣生きての勳功。よく勤めたり。は。翌や娘が面ざしにた／＼顔の愛に入る虫。燐ヲ素頭取らんとせき立つ。出かしたり。調駈引はげしき戦場に盛り。思はず見惚れて。調ハテよい子たり。調ヤア／＼官兵衛。義龍が首取て心よげなる寝顔の様天晴れ大勇頼みだナア。孫と祖父とが初見参。産着のつたる當の敵左枝犬清見参せんと。調あり今ぞ勘當赦すぞと。慈愛の詞に久一重もくれもせず。邪見に振りし刀の鎗ひつさげて駈来る母衣武者。歩み寄吉はじめ。痛手も忘るゝ手負ひの悦び。下。さぞ恐しき夢や見ん。不便の孫つて頬當兜。かなぐり取れば木下當吉。心を察して御大將。調未來へ赴く犬清が寢姿や。現在娘の刈れにも涙一滴こつて頬當兜。かなぐり取れば木下當吉。心に恩賞せんすソレ久吉。調ハツと答へばさぬ官兵衛。義に張詰めし強弓も血御前に向ひ謹んで。此の久吉が下知に従ひ敵地に入つて命を落し。謀計を行て母衣組に包みし首を故實をフシ正しの緒の弦に折れたるか扱て。可愛やとひしはあれなる犬清。また戦場にて義差置けば。調ヤアこれこそ主君義龍公大聲上げ。勇氣挫けて身もふるひ刀持龍を討取る。武功を現はす犬清は。地即の御首。エ、淺ましき御有様。犬清につ手は大磐石。鐵丸の如き魂も今ぞとち是にと鎗拾得て。母衣組取れば脊負恩賞とは我に送つて情をかけ勇氣を挫ろけてはら。／＼とどめ兼ねたる。ひし稚子。ヤア清かかと手負ひの千里かん結構よな。いよ／＼鬱憤重なる春恩愛の涙。汲出す如くなり。地犬清に寄りも寄られぬ深手の苦痛。母も心根永。覺悟ひろげと詰寄れば。ヤア龜忽つこと打笑ひ。久吉殿の厚恩にて御勤思ひやり千々に亂るゝ胸の糸。地久吉龜忽。當の敵はこの久吉が負うたる犬氣御免ある上は。思ひ置く事少しもな重ねて。調この稚子の犬清に御勤氣御清サア討て竹中。地オ、いふにや及ぶし。今こそ女房舅殿。仇も恨みも是ま赦免下さらば。われに加増の君恩にもとすらりと引抜き振上ぐる。白刃の光で／＼。お暇申すと突込む刀廻す。

